

ひと

福島と世界をつなぐ福島大職員

William McMichael

ウィリアム・マクマイケル さん (29)

2011/11/29
期日

「福島は死んでいない。だから福島に勉強に来てほしい」。福島大学の国際交流担当職員として、内外への発信に努めている。ルーマニア政府に招かれてブカレスト大学で呼びかけたり、カナダでの国際会議や米ニューヨークの見本市に駆けつけたり。11月にはドイツやフランスへも足を運んで福島大への留学を呼びかけた。父はカナダ人、母は日本人で、バンクーバー生まれ。幼少期を過ごした徳島県で、新渡戸稲造に憧れ、日本での仕事を望んだ。4年前、国際教育交流協議会から福島県に派遣され、昨年、福島大学の生課副課長に採用された。

震災直後に多くの外国人が出国するなか、福島から離れなかつ

た。「海外で『ゴーストタウン』と報道され、許せなかった。福島の新渡戸稲造として海外との架け橋になろうと思った」。震災や放射能の情報を翻訳してホームページに載せ、原発の状況を心配する外国人からの電話にも対応した。近所のスーパーでは、行列ができてパニックが起きないどころか、抱っこしていた長男(1)のためにと、店員はミルクを手渡してくれた。「福島の人のために、恩返しをしたい」

日本人の妻との間に11月、第2子も生まれた。震災は、家族が一緒に暮らせる日常こそ幸せだと教えてくれた。「だから僕はこれからもずっと家族で福島に住む」

文・斉藤寛子 写真・安富良弘